

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06656

研究課題名（和文）日本人青年における未来結果の熟慮が持つ役割の検討とキャリア教育的介入

研究課題名（英文）Considerations of future consequences in Japanese adolescents and career education intervention

研究代表者

千島 雄太（Chishima, Yuta）

筑波大学・人間系・特任助教

研究者番号：30779608

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、未来結果の熟慮の機能を明らかにし、それを高めるための教育現場での介入方法を検討するため、3つの研究を行った。研究1では、高校生と大学生を対象として、未来結果の熟慮尺度を日本語に翻訳し、信頼性と妥当性の検証を行った。研究2では、未来結果の熟慮が良好な大学生活を予測することを縦断調査によって明らかにした。研究3では、未来結果の熟慮の基盤となる「未来の自分と現在の自分のつながり」を構築するための教育的介入を行った。未来の自分の立場から現在の自分に手紙を送ることに効果があることが実証された。

研究成果の概要（英文）：The aims of this study are to examine adaptive function of “considerations of future consequences” (CFC) and to explore the way of career education intervention to enhance the CFC. In study 1, questionnaire surveys were conducted toward Japanese high school and undergraduate students in order to examine the reliability and validity of the Japanese CFC scale. In study 2, results of longitudinal survey showed that the CFC promoted adaptive campus life in one year later. In study 3, a career education intervention using letters to future self was conducted in high school. Results suggested that taking perspective of future self is more effective on creating connectedness toward future self.

研究分野：教育心理学

キーワード：教育心理学 青年心理学 キャリア教育 時間的展望

1. 研究開始当初の背景

内閣府自殺対策推進室のデータによると、進路の悩みなど「将来展望」に関する原因から自殺した大学生は、2009年～2014年の6年間で1018名(34.2%)に上り、将来に希望が持てないことは、極めて重大な自殺のリスクであることが指摘されている(佐藤, 2015)。加えて、内閣府(2014)の「子ども・若者白書」によると、日本の青年(13～29歳)は、「あなたは、自分の将来について明るい希望を持っていますか」の質問への肯定率(61.6%)は、他の先進国の青年と比べて著しく低いことが示されている。以上のことから、日本人青年が抱えている希望のなさは深刻な問題であるといえる。

これまで、青年の希望に関する心理学的研究は数多くなされてきたが(e.g. Snyder et al., 1991; 白井, 1994; Zimbardo et al., 1999), 近年では、将来と現在のつながりや連続性を重要視する研究が増えてきている。Oyserman et al. (2006)や Oettingen et al. (2011)の研究では、どんなに将来を肯定的に見ていたとしても、それが空想的で現在とのつながりが薄ければ、実際の行動や目標追求に影響しないことを示している。つながりを重視する研究の代表例として、未来結果の熟慮(Consideration of Future Consequences)に関する研究が挙げられる。未来結果の熟慮とは、「人々が現在の行動によって起こりうる未来の結果について熟慮することであり、熟慮された未来の結果から影響を受けること」と定義される(Strathman et al., 1994)。これまでの研究において、未来結果の熟慮は、学業成績(Adelman et al., 2016)や、希望するキャリア計画やそのための準備(Strauss et al., 2012)などと正の関連が示されている。

未来結果の熟慮の測定は、Strathman et al.(1994)によって開発された、12項目から構成される1次元の尺度(Consideration of Future Consequences Scale)が多用されてきた(項目例: 何かを決めるとき、将来それが自分にどう影響するか考える)。しかしながら、この尺度は、2因子構造(Joireman et al., 2008; Petrocelli, 2003; Toepoel, 2010), 2～3因子構造(Rappange et al., 2009), 4因子構造(Zhang et al., 2015)などが示され、因子構造について知見が一致していない。本邦における既存の翻訳された尺度(井上・有光, 2008)も、3項目が因子負荷量の低さを理由に分析から除外されている。これらの問題点を解決するために、近年では、14項目版の開発(Joireman, et al. 2012)や、階層的因子分析によって、一般因子とグループ因子に分解する「双因子モデル」による検討(McKay et al., 2015a, 2015b)などが試みられており、理論的整合性のある結果が得られている。そのため、本研究においても近年の研究動向を踏まえて、国際水準に沿った14項目版の尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討することとした。

なお、当初は未来結果の熟慮について日本

人以外のデータを収集して国際比較を行う予定であったが、予算の都合で断念せざるをえなかった。

2. 研究の目的

・リサーチクエスチョン①「日本の青年にとって、未来結果を熟慮することはどのような意義があるのか？」

先述の通り、比較的日本人青年は将来への希望が持ちにくいいため、未来結果を熟慮して、現在の行動を行う程度も少ないと考えられる。このことを明らかにするためには、尺度の開発を行った後、実際に国際比較の研究を行う必要がある。そのため、本研究の第一の目的を、日本語版未来結果の熟慮尺度の作成とし、日本人青年の特徴を明らかにすることとする。

また、未来結果を熟慮することは、現在の生活だけでなく、実際の未来の生活に対しても好影響を及ぼすのかということについては、これまでほとんど検討されてこなかった。Joireman & King(2016)は、これまでの22年間に渡る未来結果の熟慮尺度を使用した研究をレビューし、横断調査による研究が多く、縦断調査によってその影響を明らかにすべきと主張している。特に、環境移行期には、未来の生活に関する期待が高まり、同時に期待外れも生じやすいことが知られている(千島・水野, 2015; 都筑, 2014)。そのため、本研究の第二の目的を、縦断調査を通して、未来結果の熟慮が、進路選択や環境移行後の適応に及ぼす影響を明らかにすることとする。

・リサーチクエスチョン②「未来結果の熟慮を促進するために、どのような教育的な取り組みが有効なのか？」

未来結果を熟慮し、その熟慮が現在の行動に影響するためには、①現実的な未来を思い浮かべること、②未来と現在の連続性を意識することが不可欠である。これらを同時に促進することができる具体的な手法として、ロールレタリング(役割交換書簡法)が挙げられる。ロールレタリングとは、一人の人物が自己と他者の双方の役割を演じて手紙を交換する心理技法のことであり(春口, 1995)、教育現場でも実践例が報告されている(岡本, 2007)。本研究では、新田(2002)を参考に、一方の役割を「現在の自分」とし、もう一方の役割を「3年後の自分」として、手紙を送受信するという教育的介入を行う。そこで、本研究の第三の目的を、ロールレタリングが未来結果の熟慮やキャリア形成にもたらす効果を明らかにすることとする。

以上の目的から、研究1を「未来結果の熟慮尺度の日本語版の開発(以下、尺度開発)」とし、研究2を「未来結果の熟慮が環境移行後の適応に及ぼす影響(以下、縦断研究)」とし、研究3を「未来結果の熟慮の促進を意図した教育的介入(以下、教育的介入)」とした。

3. 研究の方法

研究1 (尺度作成) : 高校生約 1500 名と大学生約 600 名を対象に、質問紙調査を実施した。また、項目表現の理解度を調査する必要が出てきたため、高校生 300 名に Web 調査を行った。調査内容としては、未来結果の熟慮尺度、セルフ・コントロール尺度、時間的態度尺度などを用いた。尺度の項目については、元尺度作成者の Joireman 先生と協議しながらバックトランスレーションの手続きを踏んで翻訳した。尺度項目の具体例としては、未来の下位尺度で、「物事が将来どうなるのかよく考え、それに向けて日々行動しようとする。」「成果が出るまで長年かかることを成し遂げるために、よく行動を起こす。」などである。即時の下位尺度では、「将来のことは「何とかなる」と考えて、目の前にある関心事だけをやる。」「決定や行動をする時は、手軽さ(結果がすぐ得られるなど)を重視する。」である。

研究2 (縦断研究) : 1 年間の間を空けて縦断調査を行った。当初は 3 回の縦断調査を行う予定であったが、予算の関係で断念した。大学進学予定者を対象に Web 調査を実施し、Time 1 の時点で 580 名の回答が得られた。ただし、Time 2 の時点では 63 名の回答に留まった。調査は、クロス・マーケティング株式会社に依頼した。調査内容としては、未来結果の熟慮尺度、大学生への期待(Time 1 のみ)、センター試験得点率 (Time 1 のみ)、現在の生活満足感、大学生活への適応(Time 2 のみ)、学業成績 (Time 2 のみ) であった。

研究3 (教育的介入) : 高校 1, 2 年生 265 名を対象者として、高校の教室で介入を行った。調査内容としては、3 年後の自己連続性、希望、進路成熟度、希望進路先、学業満足遅延行動、手紙の主観的効果・記入内容などであった。当初は未来結果の熟慮尺度を含める予定であったが、未来結果の熟慮を高めるにはその前提となる現在と未来の自己の連続性に働きかけることが有効であると考え、連続性の向上を目的とした介入とした。参加者は、3 年後の自分に返信した後に現在の自分に返信を行う「返信あり条件」、返信のみを行う「返信なし条件」、何も課題を行わない「統制条件」の 3 条件にランダムに割り振られた。

4. 研究成果

研究1 (尺度作成) : 分析の結果、先行研究と同様に双因子モデルの適合度が最も高いことが示された。また、内的整合性の値も各下位尺度で.76 以上であり、時間的安定性も十分であった。セルフ・コントロール等の変数との相関係数も仮説通りであり、十分な信頼性、妥当性を有する尺度が開発された。この研究によって、日本のデータを用いて未来結果の熟慮に関する国際比較などを行えるようになり、後続の研究を進展させる土台となる研究になったといえる。

研究2 (縦断研究) : Time 1 のデータでは、未来結果の熟慮は、大学生活への期待と中程度の相関が確認された。また、センター試験得点率とも.26 の相関が示された(Table 1)。ここから、未来結果の熟慮は、学業成績とも関連していることが明らかにされた。Time 2 のデータを含めた分析では、大学入学前の未来結果の熟慮は、1 年後の大学生活の適応を予測していた。特に、大学生活の学業の高さと正の関連があり、遠い未来を熟慮することは、充実した大学生活を促進することが明らかになった。ただし、1 年後の学業成績とは有意な関連は見いだせなかった。この研究によって、未来結果を熟慮することは、現在の生活だけでなく、実際の未来の生活に対して好影響を及ぼすという新たな知見が示された。

Table 1 未来結果の熟慮と各変数の関連

	未来	即時
時間的ゆとりの期待	-.15	.32 **
友人関係への期待	.46 ***	.03
行事への期待	.34 ***	.01
学業への期待	.39 ***	-.03
進学先の満足度	.19 *	.07
センター得点率	.26 **	-.08

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

研究3 (教育的介入) : 3 年後の自己連続性、進路自律度の上昇度合いを指標とした分析では、「返信あり条件」でより得点が上昇したことが示された(Figure 1)。手紙の主観的効果についても、自己の客観視の得点が返信あり条件で高かった。これらの結果から、3 年後の自分から今の自分に手紙を送ることが進路意識の成熟に繋がることが明らかにされた。これまでの教育活動において、未来の自分に向けて手紙を書くことは数多く行われてきたが、本研究では「返信なし条件」において、いずれの変数も効果を見出すことはできなかった。一方で、3 年後の自分の立場になって今の自分に手紙の返信をする課題を含めることで、キャリア教育としての効果が示された。そのため、本研究の知見は今後、教育現場における有益な活動を行うための指針となると予測される。

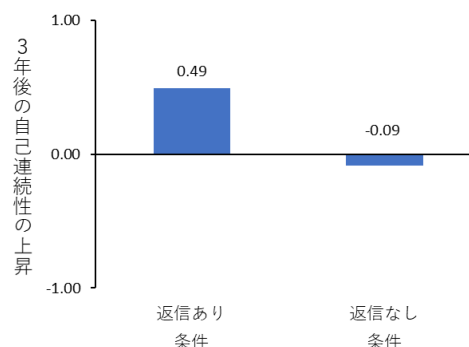


Figure 1. 3年後の自己連続性得点の条件間の比較

<主要引用文献>

- Hershfield, H. E. (2011). Future self-continuity: How conceptions of the future self transform intertemporal choice. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 1235, 30-43.
- Joireman, J., Shaffer, M. J., Balliet, D., & Strathman, A. (2012). Promotion orientation explains why future-oriented people exercise and eat healthy: Evidence from the two-factor Consideration of Future Consequences-14 Scale. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 38, 1272-1287.
- Strathman, A., Gleicher, F., Boninger, D. S., & Edwards, C. S. (1994). The consideration of future consequences: Weighing immediate and distant outcomes of behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 742-752.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 4 件)

- ① Chishima, Y. (2018/09). Consideration of future consequences and test scores for university admissions in Japanese pre-university students. European Association for Research on Adolescence 2018, Ghent, Belgium.
- ② Chishima, Y., & Moro, T. (2018/07). Future is now: School intervention to enhance future self-continuity using letters. The 40th annual Conference of the International School Psychology Association, Tokyo, Japan.
- ③ 千島雄太 (2017/11). 大学生における未来結果の熟慮と学業成績の関連—進路成熟度を媒介変数として— 日本青年心理学会第25回大会, 岐阜.
- ④ Chishima, Y., & Joireman, J. (2017/08). Consideration of future consequences and academic performance in Japanese adolescents. The 18th European Conference on Developmental Psychology, Utrecht, Netherlands.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
- 取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

<https://sites.google.com/view/yutachishima/home>

6. 研究組織

(1)研究代表者

千島 雄太 (CHISHIMA, Yuta)

筑波大学・人間系・特任助教

研究者番号：30779608

- (2)研究分担者 なし
- (3)連携研究者 なし
- (4)研究協力者 なし